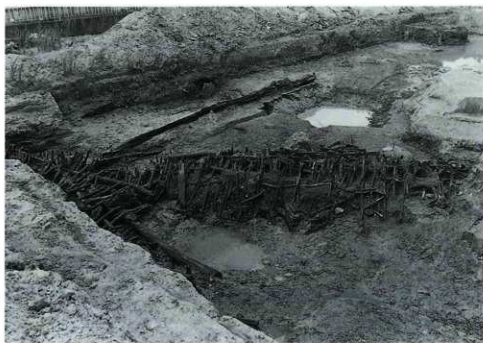


栗東町埋蔵文化財発掘調査

1999年度 年 報



2001.3

栗 東 町 教 育 委 員 会
（ 財 ） 栗 東 町 文 化 体 育 振 興 事 業 団

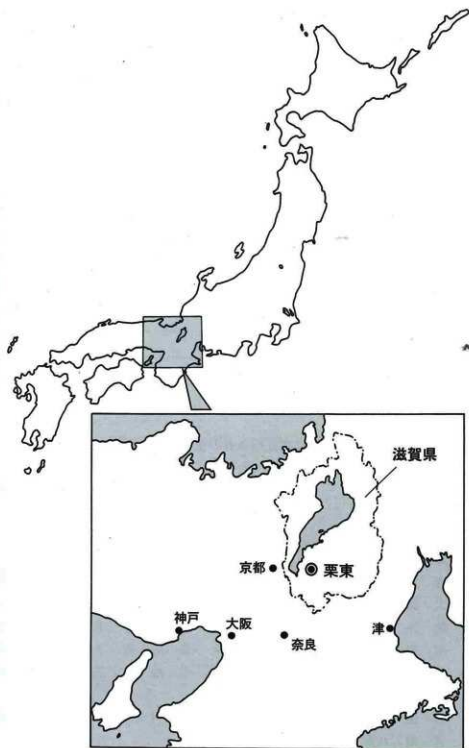


表紙の写真 (上) 坊袋遺跡⑧
(竪穴住居)

(下) 中沢遺跡⑦
(堰遺構)

—— 栗東町埋蔵文化財発掘調査 ——

1999年度 年 報



2001.3

栗東町教育委員会
（助）栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は、(財) 栗東町文化体育振興事業団が受託した1999年度(平成11年度)埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助事業および町事業の概要である。
2. 調査にあたっては、滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が主体となり、(財) 栗東町文化体育振興事業団が実施した。なお、国庫補助事業および町事業は栗東町教育委員会が実施した。

3. 調査体制は以下の通りである。

栗 東 町 教 育 委 員 会	生涯学習課	課 長 奥 村 明
	文化財保護係	係 長 清水 好 洋
		主 査 松 村 浩 浩
		主 事 吉 田 みず穂
(財) 栗東町文化体育振興事業団	埋蔵文化財調査課	課 長 仙 石 龍 岳
		係 長 大 崎 隆 志
		主 査 近 藤 広
		主任技師 佐 伯 英 樹
		主任技師 雨 森 智 美
		技 師 藤 岡 英 礼

4. 本書の執筆は各調査担当が行い、編集は調査担当者の意向のもと雨森が行った。
5. 調査内容中の調査位置図は、スケールを指示しているもの以外はすべて5千分の1である。

6. 調査参加者

調 査 員	畑 本 陽 子	森 智 美			
調 査 補 助 員	青 木 タキ子	石 原 恵 子	井 上 良 子	上 田 和 枝	
	大 岡 道 代	太 田 好 枝	教 野 妙 子	北 野 ふみえ	
	駒 井 伊 助	国 松 好 子	柴 原 慶 子	淡 江 享 一	
	園 田 菊 江	鷹 羽 淳	高 屋 道 子	千 代 清 美	
	辻 井 一二美	西 田 百合子	平 松 しず子	森 野 靖 子	
	横 山 こ と				
整 理 員	岩 根 隆 子	奥 村 美枝子	木 村 三津子	穴 戸 貴 子	
	宮 嶋 八重美				

目 次

目 次	1
事 業 報 告	2
栗東町遺跡地図	4
遺 跡 位 置 図	5
受託事業一覧表	7
① 辻 遺 跡	8
② 辻 遺 跡	10
③ 辻 遺 跡	12
④ 辻 遺 跡	13
⑤ 辻 遺 跡	14
⑥ 高野遺跡	15
⑦ 中沢遺跡	16
⑧ 坊袋遺跡	22
⑨ 下鉤遺跡	24
⑩ 下鉤遺跡	32
⑪ 下鉤遺跡	35
⑫ 下鉤遺跡	36
⑬ 下鉤遺跡	38
⑭ 十里遺跡	42
⑮ 小柿遺跡	46
⑯ 小柿遺跡	50
国庫補助事業・町事業一覧表	51
⑰ 小槻大社10号墳	52
⑱ 十里遺跡	56
⑲ 伊勢遺跡	57
⑳ 靈仙寺遺跡	58

事業報告

〈発掘調査事業〉

- ◎現地調査受託事業件数……………16件
- ◎国庫補助・町事業調査件数………4件
- ◎整理調査事業件数……………1件（昭和59、60年度調査）

〈展示公開〉

収蔵企画展示

場所：センター（1階）収蔵展示コーナー

期日：年2回（4月～9月 9月～3月）

内容：収蔵資料のテーマ展示

「縄文時代の栗東」（4～9月）

「発掘調査～整理作業まで」（10～3月）

調査情報速報展示

場所：センター（2階）展示コーナー

期日：随時

内容：最新調査成果の展示公開

林遺跡（4～6月） 野尻遺跡（7～9月）

多福寺遺跡（10～12月） 辻遺跡の初期須恵器（1月～3月）

〈公表事業〉

・現地説明会

『十里遺跡現地説明会』

日 時 7月20日（祝）

参加人数 150名

内 容 屋敷跡に伴う、飛鳥時代の祭祀場を発見

〈普及啓発〉

・入門講座（栗東町文化体育振興事業団共催）

『子ども考古学自由研究クラブ』

会 場 センター・文化財学習室

日 時 7月24日、31日

参加人数 107名

内 容 古代の生活の様子等の説明 体験学習他

・講座（栗東町文化体育振興事業団共催）

『聞く！見る！ふれる！“ふるさとの歴史”』

会 場 センター・文化財学習室

期 日 10月23日、30日、11月6日

参加人数 68名

内 容 「近江の文字資料について」

「十里遺跡出土の祭祀場について」

「下鈎遺跡の青銅製品」

演 修 氏（滋賀県文化財保護協会技術主任）

近藤 広（事業団主査）

佐伯 英樹（事業団主任技師）



▲速報展示



▲現地説明会



▲子ども考古学自由研究クラブ

・調査研究報告会（栗東町文化体育振興事業団共催）

『文字資料が語る律令期の湖南』

会 場 センター・文化財学習室
期 日 3月4日
参加人数 77名
内 容 講演と報告、検討会
講 演 山尾 幸久 氏（立命館大学名誉教授）
報 告 徳網 克己 氏（中主町教育委員会主任）
近藤 広 （事業団主査）



▲ 調査研究報告会

・教室（栗東町文体育事業団協力）

会 場 センター・文化財学習室など
件 数 5件
内 容 町内遺跡の説明、調査スライド映写会等
治田西 金勝 葉山東小学校
（見学・勾玉づくり指導）



▲ シンポジウム

・古道ウォーク

期 日 11月
コース 湖南アルプス方面
内 容 歴史ロマンあふれた周辺の遺跡や文化財にふれることを通じて、文化教養を高めるとともに地域の歴史文化への理解を深める。
備 考 栗東健康ウォークとの合同開催 『歴史の道』活用事業

・シンポジウム

会 場 栗東芸術文化会館「さくら」中ホール
期 日 9月4日（土）
参加人数 379名
内 容 下鉤遺跡等、弥生時代の大型建物出土遺跡を取り上げ、講演のディスカッションを開催するとともに、併せて関連遺物の展示もおこない、地方都市の将来像を考えていくでも興味深い歴史的テーマであるこの時代の「クニ」について検討を深めた。

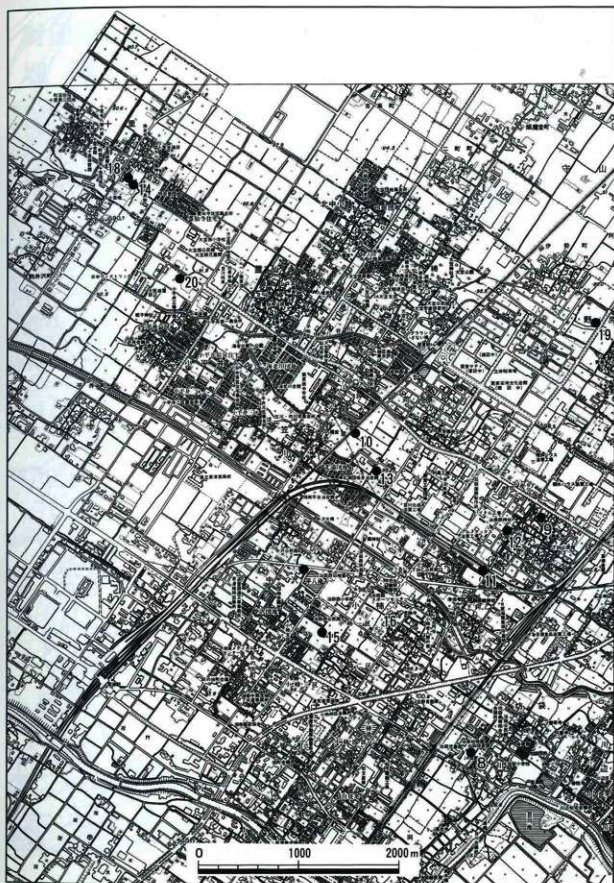
コーディネーター 原口 正三 氏（元甲子園短期大学教授）
パネラー 丸山 竜平 氏（名古屋女子大学教授）
宇津野金彦 氏（神宮司庁造営局造営部技師）
伴野 幸一 氏（守山市教育委員会主任）
近藤 広 （事業団主査）
佐伯 英樹 （事業団主任技師）

・冊子等の発行

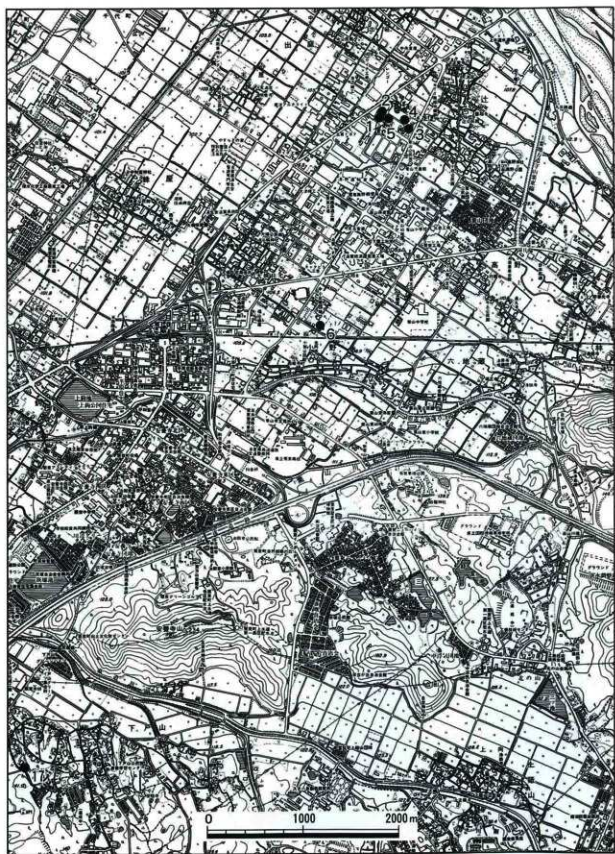
『栗東町埋蔵文化財発掘調査1998年度年報』
『1983年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』
『はくつ1999 栗東町話題の発掘調査』
『栗東文化財ウォークNo1 多喜山城跡・上鉤寺内』

・職員の派遣

講 師	近藤 広 『豊中歴史同好会』	1999年6月
	近藤 広 佐伯英樹 『玉川中学選択社会科』	1999年11月～12月
	佐伯英樹 『上蚊野古墳群発掘調査に伴う指導』	1999年12月
調査・監修	藤岡英礼 『新庄町歴史民俗資料館展示用「布施山城」模型制作』	1999年6月～2000年3月
発 表	近藤 広 佐伯英樹 『第76回滋賀県埋蔵文化財センター研究会』	2000年3月



遺跡位置図①



遺跡位置圖②

財団法人栗東町文化体育振興事業団

埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査

1999年度受託事業調査一覧表

No	通称名	所在地	調査原因	現地調査期間	調査面積	調査結果	ページ	担当
1	辻	辻地先	区整保留地	1999.5.10～ 1999.6.17	518㎡	竪穴住居・土坑（古墳）、掘立柱建物（平安）	8	佐伯
2	辻	辻地先	宅地造成工事	1999.8.19～ 1999.10.6	664㎡	竪穴住居（古墳）、掘立柱建物・溝（平安）	10	藤岡
3	辻	辻字東八王子424	宅地造成工事	1999.7.19～ 1999.10.28	1,073㎡	流路・溝（古墳～中世）	12	大崎
4	辻	辻字東八王子424	宅地造成工事	1999.8.9～ 1999.9.30	780㎡	流路・溝（古墳～中世）	13	大崎
5	辻	辻字八王子580	宅地造成工事	1999.10.18～ 1999.12.10	500㎡	流路・水路・掘立柱建物（奈良～中世）	14	大崎
6	高野	六地藏字高木1148他	事務所建設	1999.6.28～ 1999.7.14	200㎡	流路（古墳時代前～後期）・掘立柱建物・火葬墓	15	大崎
7	中沢	中沢168-1・169	共同住宅建設	1999.6.21～ 1999.8.13	350㎡	堰・掘立柱建物・流路（弥生～古墳）	16	藤岡
8	坊袋	目川・坊袋地先	道路建設工事	1999.12.15～ 2000.2.24	2,200㎡	竪穴住居・掘立柱建物・方形周溝墓（弥生）	22	大崎
9	下鉤	下鉤字里ノ内590他	宅地造成工事	1999.10.8～ 2000.3.18	637㎡	堀・溝・掘立柱建物（中世～近世）、弥生土器片	24	藤岡
10	下鉤	刈原字下石原74他	宅地造成工事	1999.10.20～ 2000.3.20	3,910㎡	流路・溝・掘立柱建物（平安～中世）・周溝墓（弥生）	32	佐伯
11	下鉤	下鉤725-1	共同住宅建設	1999.8.9～ 1999.9.2	300㎡	流路・溝・（古墳）、井戸・ビット（平安）	35	近藤
12	下鉤	下鉤1648・1650	共同住宅建設	1999.10.18～ 1999.11.16	350㎡	溝・ビット（弥生）、井戸・ビット（平安）	36	近藤
13	下鉤	下鉤字神ノ子1216-3他	共同住宅建設	1999.7.26～ 1999.10.26	1,100㎡	溝・堀・掘立柱建物（弥生）	38	佐伯
14	十里	十里81他	道路改修工事	1999.4.26～ 2000.3.17	1,000㎡	掘立柱建物・溝（飛鳥）	42	近藤
15	小柿	小柿5丁目376・377他	宅地造成	1999.3.10～ 1999.6.15	4,120㎡	竪穴住居・溝（縄文）・流路・溝（中世）	46	藤岡
16	小柿	小柿1丁目280-1他	道路建設工事	1999.12.22～ 2000.3.17	540㎡	竪穴住居・土坑（弥生）	50	藤岡

① 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字辻地先

調査期間 1999年5月10日～6月17日

調査面積 518㎡



調査地位置図

辻遺跡は、野洲川左岸の自然堤防状微高地に立地する縄文時代前期から近世以降まで続く複合遺跡である。これまでの調査で古墳時代の大規模集落として周知されているほか、八稜鏡や金銅仏・銅印が出土するなど、平安時代にも目を見張るものがある。

本調査は、辻・小坂西部土地区画整理事業に伴い実施した。

遺構検出面は造成盛土の下に残る旧耕作土直下である。遺構は、古墳時代初頭の竪穴住居1棟と土坑、平安時代以降の掘立柱建物2棟を検出した。

竪穴住居SH30は、一辺5mの正方形で、ほぼ南北の方位をとる。後世の削平のため深さは約5cmと浅く、出土遺物は少なかったが、受口状口縁甕や高杯、砥石などが出土した。

中央部にある地床炉は、短径50cm、長径80cm。深さ9cmを測る平面不整形の窪みで、中央に30×40cmの焼土面がある。窪みの周辺には炭が散在していた。南壁中央の屋内土坑は、貯蔵穴と思われる。二段に掘り込まれていて、上段は、1～1.2mを測る不整形の浅い掘り込みで、下段は60×85cmの長方形。深

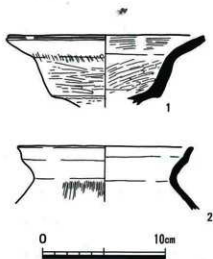
さは床面から30cmであった。庄内併行期の高杯(1)が出土した。

竪穴住居と同時期の遺構として、SK121がある。直径60cm、深さ48cmの土坑で、底部近くから受口状口縁甕が出土した。

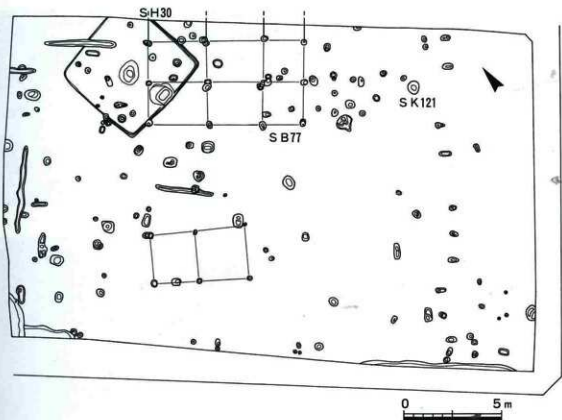
SB77は3間×4間、一辺8mの掘立柱建物である。(北東側2間分は②辻遺跡調査区にまたがる)柱穴埋土から土師器や黒色土器の小片が出土したが、時期を決定する資料とはならなかった。

その他、古墳時代の地山面下層から縄文土器が出土した。精査したが、遺構は検出できなかった。縄文土器の出土状況は地山面から最も深いもので下層に70cmであった。

(佐伯)



竪穴住居出土遺物実測図



遺構図



SH 30



SH30 貯蔵穴



下層 縄文土器出土状況



調査地全景

② 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻地先

調査期間 1999年8月19日～10月6日

調査面積 664.71㎡

はじめに

辻遺跡は古墳から平安時代の大規模集落の存在で知られ、今回の調査区は辻遺跡の中央部付近にあたる。

主要遺構の概要

調査区の基本層序は上層から順に、層厚92cmのバラス層、15cmの耕土を経て、遺構面に至る。遺構面は二面あり、古墳～平安時代の遺構が展開する、青味を帯びた黄褐色シルト層（層厚8cm）。これを包含層とし、下層遺構の展開する茶褐色シルト層に大別できる。茶褐色シルト層からは、不整形の竪穴状遺構を検出したが時期を特定するに至らなかった。

黄褐色シルト層上の遺構について述べると、竪穴住居（SH-1）は平面規模3.2×4.6m、残壁高は5cmを測る。壁溝・柱穴・土坑を確認した。出土遺物から古墳時代の所産と考えられる。

掘立柱建物は二棟（SB-2・3）確認でき、栗太郡条里と同一方向を採る。出土遺物により、12世紀の所産と思われる（SP-80）。掘立柱建物の下層は、検出幅7m以上、検出深さ3mの旧河道を検出したが、出土遺物は認められなかった。（藤岡）



調査地位置図



調査地全景



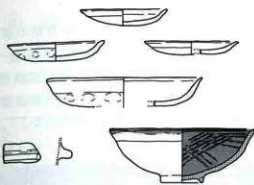
SH-1全景



下層遺構検出状況



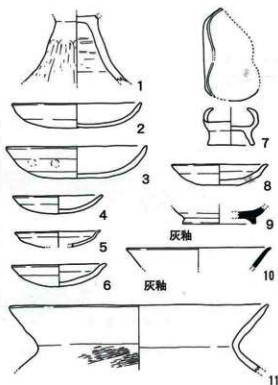
下層遺構



SP-80出土遺物実測図 (S=1/4)

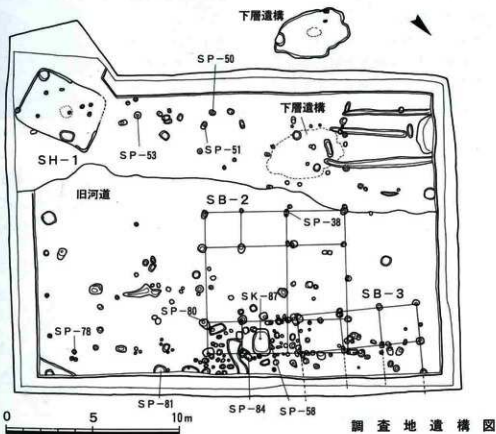


SP-80土器出土状況



1: SH-1北側土坑 2: SP-51 3: SK-87
4: SP-84 5: SP-38 6: SP-50 7: 検出面
8: SP-78 9: SP-58 10: SP-53 11: SP-81

出土遺物実測図 (S=1/4)



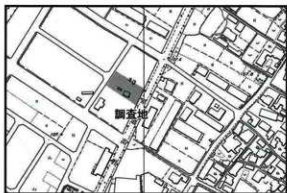
調査地遺構図

③ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻字東八王子424

調査期間 1999年7月19日～10月28日

調査面積 1073㎡



調査地位置図

辻遺跡は野洲川流域を代表する古墳時代集落遺跡として広く周知されている。なかでも石製品製作工房跡や豊富な初期須恵器の出土など、興味深い内容を有している。

今回は当遺跡に複数点在する集落間の境界付近での調査であったが、古墳時代から中世期に至る遺構遺物が確認され、その密度の高さを改めて再確認させるものとなった。

主たる出土遺構は小さな屈曲を繰り返して北西に流れる小河川である。幅2～3mで、埋土は細かな砂層からなる。6～7世紀代の須恵器（すえき）が良好な状態で出土してい

る。

調査区南東端では幅1.5mの中世期の溝跡が確認された。おそらく屋敷の区画溝の一部であろう。黒色土器や土師器が出土している。また、河川と溝の間には2.8m×0.8mの細長い土坑も見られた。屋敷墓であろうか。

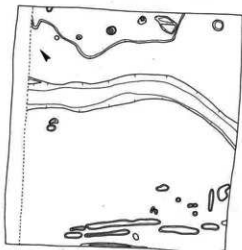
(大崎)



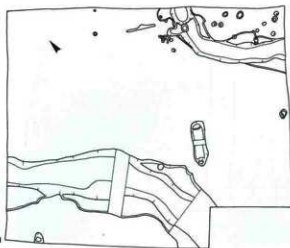
流 路



区 画 溝



調査地遺構図



④ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻字東八王子424

調査期間 1999年8月9日～9月30日

調査面積 780㎡



調査地位置図

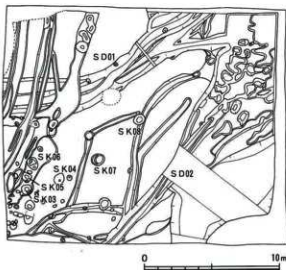
辻遺跡は複数の古墳時代集落を点在させる遺跡である。

今回の調査地点はその境界付近に当たり、小河川沿いに形成、発展するムラの様相を知る上で興味深い内容を提供するものとなった。

確認された遺構は河川跡、溝、掘立柱建物などである。

河川跡は調査区全域に広がり、西に流れる幅10mの河川と北流する同規模の別河川の合流点を形成している。埋土は厚い砂層からなり、古墳時代～中世期の遺物を包含する。

溝跡は河川的一端から北西にのびる幅2m



の人為的な掘りこみである。溝の断面はU字形を呈し、切り合い関係を持ち、若干時期の異なる2条の溝が確認された。6世紀代の須恵器が出土している。

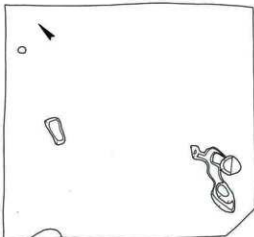
建物跡は調査区西端付近に見られる。構造等、明瞭ではないが、黒色土器片が出土している。中世期のものであろう。(大崎)



調査区(西半部)全景



溝断面



調査地遺構図

⑤ 辻 遺 跡

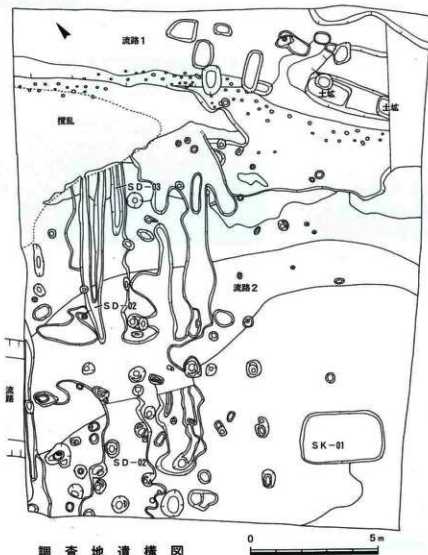
調 査 地 栗東町大字辻字八王子580

調査期間 1999年10月18日～12月10日

調査面積 500㎡



調 査 地 位 置 図



調 査 地 遺 構 図



八 稜 鏡 (X線写真)

今回の調査では中世期の掘立柱建物や小河川が確認された。

掘立柱建物は重複して2棟見られる。全体の様相は不明だが、いずれも4柱間×2柱間の身舎（もや）の2辺に1柱間の庇（ひさし）

をつけた構造の建物が想定される。

柱穴内より土師器片に混じて鉄鉄などが出土している。

河川跡は掘立柱建物下に拡がり時的に先行するものと、同時期のものが見られた。

後者は調査区北端で確認されたもの。肩口に小さな掘りこみが無数に見られ、垣根様の構築物の存在も予想される。

土器片に混じて、和鏡（八稜鏡）が出土しているのが注意される。建物の役割や性格を想定する一資料となる。（大崎）

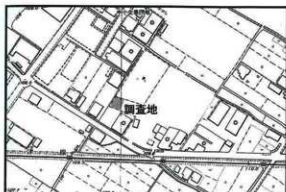
※X線写真は、滋賀県立安土城考古博物館、御滋賀県文化財保護協会中川正人氏による。

⑥ 高野遺跡

調査地 栗東町大字六地藏字高木1148他

調査期間 1999年6月28日～7月14日

調査面積 200㎡



調査地位置図



調査風景

か円形や方形の土坑跡の周辺には複数の焼土痕(径0.5m)も確認されている。墓域の一角であろうと推察される。

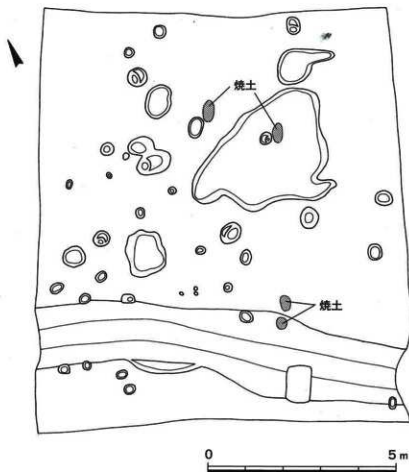
(大崎)

高野遺跡はこの地域を代表する古墳時代の集落遺跡として知られている。

今回の調査においても当該期の遺構遺物が確認され、その密度の高さを改めて認識させるものとなった。

出土した遺構は幅2メートルで北西流する小河川様の溝跡である。溝断面はU字形を呈し、深さ0.5mを測る。埋土内より7世紀前半期を中心に古墳時代後半の土器が出土している。

上記以外では、中世期(13世紀代)の掘立柱建物のほ



調査地遺構図

⑦ 中 沢 遺 跡

調査地 栗東町大字中沢168-1・169

調査期間 1999年6月21日～8月13日

調査面積 350㎡

はじめに

中沢遺跡は今回調査区の南西側の調査では、弥生～古墳時代を中心とした旧河道・墳墓が検出され、墓域的性格が考えられてきた。

墓域の反対方向たる当調査区は、集落遺構の検出が期待された。

基本層序

層厚25cmの灰褐色粘質土（耕土）直下に、黄褐色粘質土の遺構面（地山）が展開する。耕土中には弥生時代・近世・近代遺物を包含。

主要遺構の概要

調査区からは多数のピット・小溝・土坑を検出した。遺構埋土は大別すると青味の灰褐色粘質土・茶褐色粘質土に分けられる。

SD-177：幅0.6m、深さ0.5mで、断面はV字形を呈する。埋土は、上層は茶褐色粘質土、下層は青味の灰褐色粘質土である。当溝と同一方向のピットが存在するため、建物の区画溝として機能した可能性がある。出土遺物から弥生後期の所産と思われる。

SK-137・185：検出深0.3mで方形を呈する。出土遺物はV様式を主体にIV様式を含む。ピット群：ピット群の方向は大別すると、南北方向（磁北）・SD-1に併行するN-35°-W・SD-43に平行するN-50°-Wに大別できる。各方向の時期差は遺物が少ないため、判断し難いが、ピットに平行する溝から判断すると、SD-177平行→SD-43平行→南北方向の変遷が考えられる。

諸遺構の出土遺物はIV・V様式を主体とし、わずかながら庄内併行期を下限とする。IV様式以前は包含層中からも確認できない。

SD-2：検出幅25m以上、検出深1.6m以上である。全掘は避けたが、堰遺構が乗る青灰色粘質土層（下層）上に、細砂（中層）・

砂礫層（上層）が堆積する。中・下層からは弥生IV～V様式、上層からは一部庄内併行期の遺物が認められ、地山諸遺構と時期的併行を見せる。

西岸は隣接する90年度調査区でも認められない。90年度調査区と当調査区の間は2m離れるが、この間に岸が存在すると思われる。

堰遺構について

堰遺構は構造内部や付着する遺物から、弥生V様式の所産と思われる。幅1.5m、全長12m以上を測り、V字の二重構造を呈する。T-2付近で部材の一部を確認しており、平八池方向にさらに延びている。

構築方法は場所により若干の違いを見せるが、普遍的なものを図2・3に提示した。

図2は堰中央部に当たる。下層を堰の床面として階段状にカットし、堅杭を床面に内側に向けて打ち込み、次に斜材や横木を置く。この工程を外側へ繰り返す行い、堰の強度・高さを保つ。

図3は中央から外れ、図2より強度は劣る。床面は階段状としない。堰中央部は河道の最も深い所であり、堰は兩岸から中央部に傾斜しながら次第に比高を高くし、厚みを増す。東側の二重目も基本的に同構造である。

二重の堰は、河道中央部手前で相互の横木を交差させ一体化する（写真4）。堅木・斜材が入り組み、二重堰が同時期に構築されたことを窺わせる。堰の廃絶時は、流れてきた巨木が東から西に向かって部材を突き破り、破壊したと思われ、巨木周辺の部材は乱れている。これ以降、旧河道の機能は衰退し、庄内併行期にほぼ廃絶したと思われる。

おわりに

今回は中沢遺跡で、初めて安定した地山面を検出した。墳墓はなく、90年度調査地とはSD-2を隔てて性格を異にする。またSD-2は堰遺構の検出により、墓域・集落域の境目以上の機能を持つと言える。今後は集落域の具体的性格の究明が求められる。（藤岡）



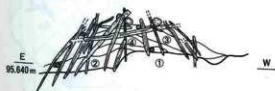
図1 調査地位置図



写真1 調査地全景



写真2 北側ピット群



①青灰色粘質土層 ②礫層 ③粗砂層 ④細砂層

図2 堰遺構断面図 (中央部)



写真3 堰遺構全景 (北側)



写真4 堰遺構分岐状況



写真5 堰遺構 (南側)



①青灰色粘質土層 ②礫層 ③粗砂層 ④細砂層

図3 堰遺構断面図

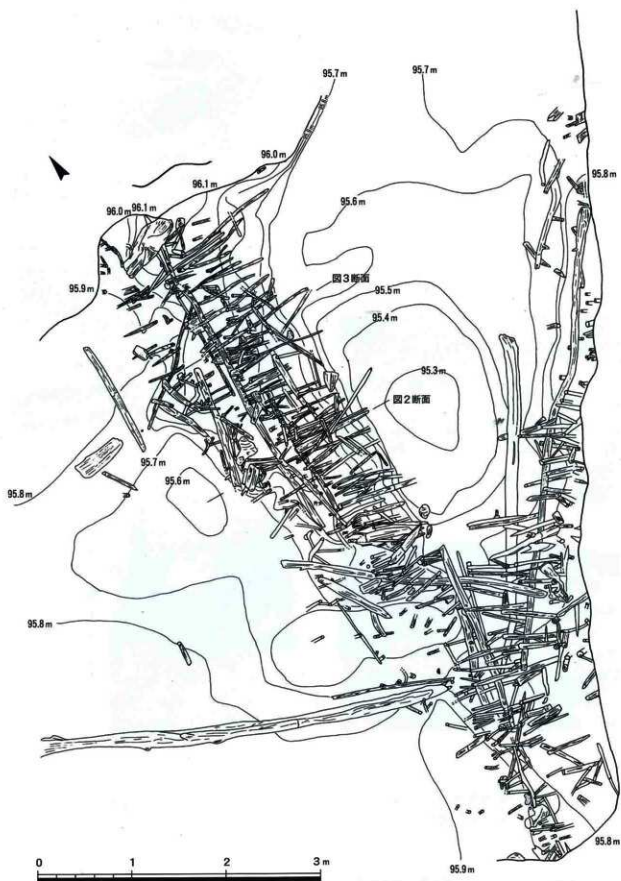


图4 堰遺構平面図

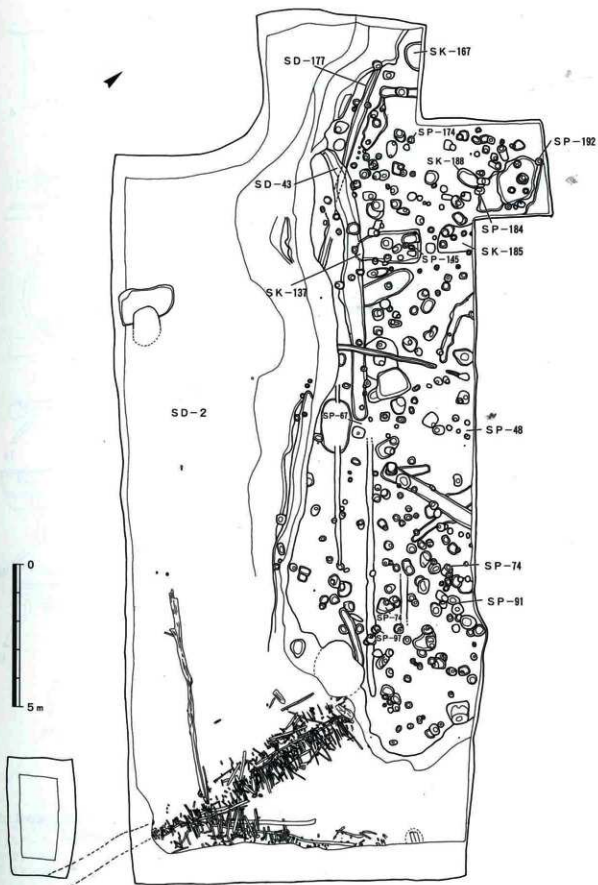
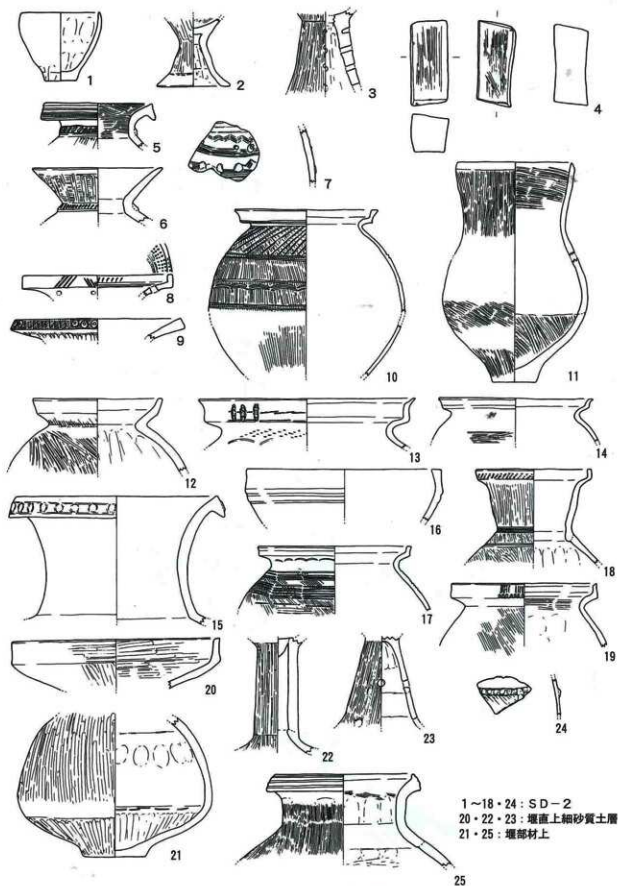
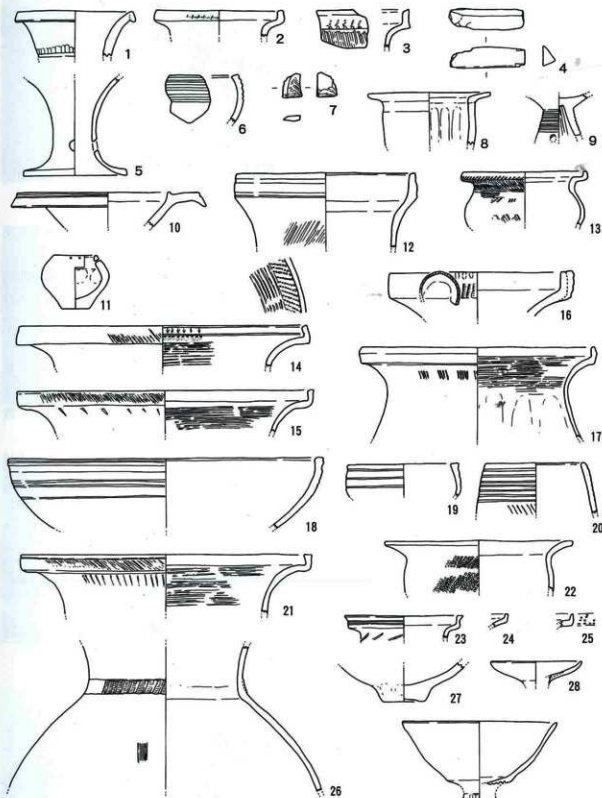


圖5 調查地遺構圖



SD-2 出土遺物実測図 (S=1/4)



1~4: SD-43 5: SP-67 6: SP-97 7: SP-48 8: SP-91
 9: SP-74 10・12: SP-145 11・14・15・18・19・21: SK-185 13: SP-174
 16: SK-167 17: SD-177 22: SP-84 24・25: SP-174 28: SP-192
 26: SK-188 27・29: SK-137

出土遺物実測図 (S=1/4)

⑧ 坊袋遺跡

調査地 栗東町大字目川・坊袋地先

調査期間 1999年12月15日～2000年2月4日

調査面積 2200㎡



調査地位置図

坊袋遺跡は弥生時代中期・後期の複合遺跡として周知されている。とくに栗山川中流域の拠点集落である中沢・下鈎遺跡との密接な関わりの中で、その形成や性格を検討すべき遺跡である。

今回の調査では大規模な河川跡が確認され、その左岸には竪穴住居や掘立柱建物からなる



掘立柱建物群

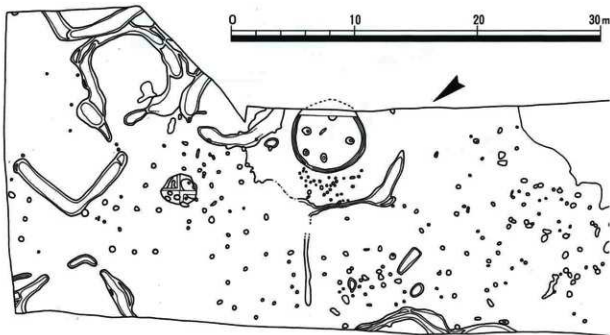
集落と小さな方形周溝墓群からなる墓域が重複して捉えられた。

河川は幅30mを測り、西流する大規模な流路である。右岸肩口には流れ込む小河川が存在も知られる。おそらく現在の金勝川の支流と想定される。

弥生時代中後期の集落構成は一時期3棟程度の建物で形づくられ、3～4時期に細分される。そのうち中期後半の群は竪穴住居1棟と掘立柱建物2棟からなる。

竪穴住居は径6mの円形を呈し、5本主柱の上屋構造をとる。外側には区画溝が回っていた可能性がある。

(大崎)



調査地南西端部



調査風景



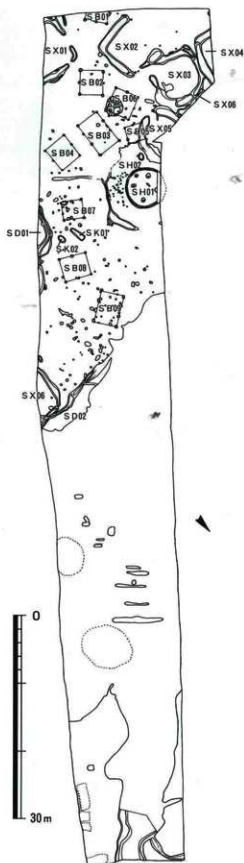
竪穴住居



方形周溝墓群



土器出土状況



調査地遺構図

⑨ 下 鈎 遺 跡

調査地 栗東町大字下鈎字里ノ内590他
調査期間 1999年10月8日～2000年3月18日
調査面積 637.42㎡
はじめに

下鈎甲集落は、字奥屋敷・字里ノ内に大別され、前者は中世土豪蓮台寺氏の邸跡とされる。過去3度の調査がなされ、字奥屋敷(1・2次)では14～15世紀を主体とし、字里の内(3次)では12～13世紀を主体とした集落跡を確認した。1・2次では栗東町域では珍しい瓦器碗の出土が集中したが、3次は黒色土器を主体とし一般集落的様相となる。今回の調査区は過去の調査区に隣接し、集落変遷の基礎データ抽出が課題であった。

基本層序

上層から順にズリ(層厚10cm)・明黄色砂礫層(層厚20cm)・茶褐色シルト層(層厚20～30cm)・黄褐色粘質土となるが、整地は必ずしも同一の土で行われていない。全体的に攪乱がはげしく、遺構の残存に影響を及ぼす。
主要遺構の概要

遺構は整地層(遺構面)により、IV期に大別できる。

I・II期は黄褐色粘質土層上に展開し、ピット・土坑・大溝を検出した。出土遺物は12～16世紀に至る。

SD-60:断面が逆台形を呈し、幅4.5m、検出深1.02mを測る。13世紀の遺物を上限とする。埋土は灰色粘質土・青灰色粘質土からなり、水流は豊富でないと思われる。当大溝は南側でSD-1と統合すると思われる。

SK-2は平面規模4.5以上×2.2m、深さ0.5mを測り、13世紀代の黒色土器などが出土した。

I期は土坑・ピット・小溝を主体とした構成である。出土遺物は黒色土器が主体で、瓦器碗は数点にとどまり、3次調査区と類似する性格と言えよう。

15・16世紀のII期になると、大溝・小溝・井戸・大型土坑が構成主体となる。ピットは減少するが、遺物量はI期と遜色なく、掘立柱建物から基礎建物に主体を移した可能性がある。大溝(SD-75)には13世紀代の遺物が混入するが、下層には15～16世紀代の焙烙が見られ、当該期の所産と思われる。また、I期でT-1・2全面に拡がっていた遺構が、II期にはSD-60以南とT-1に偏り、集落構成が2期に大きく変化したことが窺える。

III期はI・II期を埋めた黄褐色粘質土層上に展開し、江戸時代を主体とする。SD-60は埋没し、便所窠・井戸が両トレンチで検出されるなど、再度両トレンチ全体で遺構が展開する。前段落の遺構構成は変更されるが、SD-75はやや北に振れつつも継承される。

III期の出土遺物には陶磁器類があり、18世紀頃から肥前系陶磁器が増加する傾向にある。

IV期はIII期を埋めた黄色砂礫層上に展開する近代～現代の遺構である。T-2は東端に耕作痕、西側にコンクリート製の建物基礎が見られるが、両者の重複関係は明らかにしたい。耕作痕からは江戸期の遺物が出土し、III期後半に形成された可能性がある。

聞き取り調査によると、T-2南側はSD-75に沿って竹藪があったとする。南端は建物痕跡が無く、明治期以降永らく放置されていたのであろう。

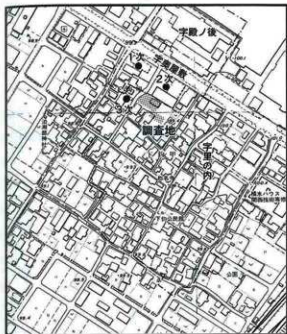
SD-75は昭和期まで維持され、上層からはラムネ瓶が出土したが、昭和期以降は側溝状の溝として整備され今に至る。この他の遺構は井戸・土坑があり、T-1に偏る。

おわりに

両トレンチは、調査前の土地所有者が同一であった。同家は集落内でも有力な家筋の一つであったが、SD-1は所有者の土地画面上の制約を受けることなく、一貫して維持されていた。ただし、同時期に成立したSD-60が16世紀に埋没することについては、村落形成の中でも大きな画期で、その意味を再検

討する必要性を感じる。

(藤岡)



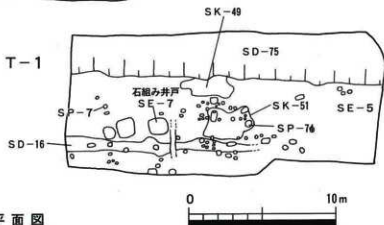
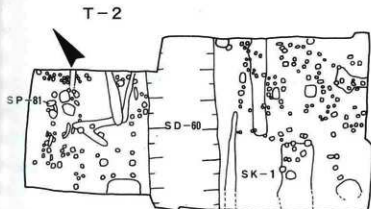
調査地位置図



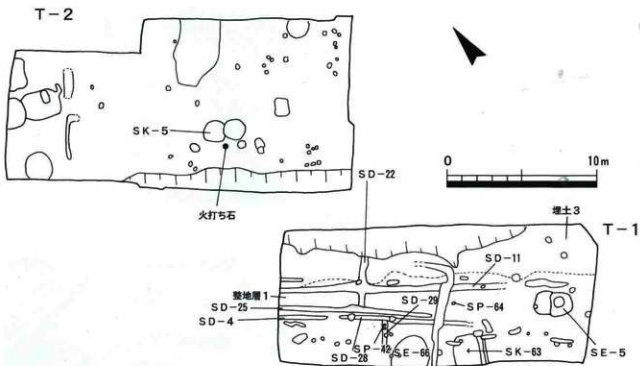
T-1 I・II期側完掘状況



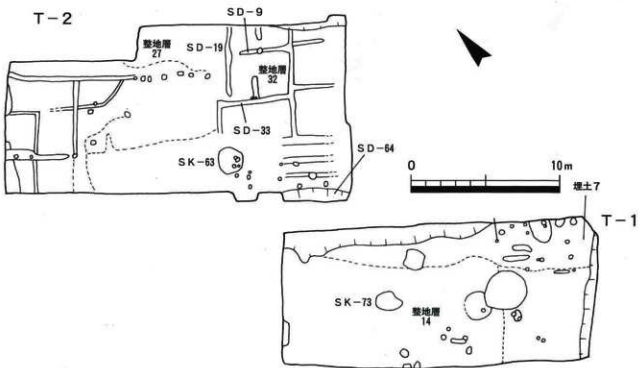
T-2 I・II期側完掘状況



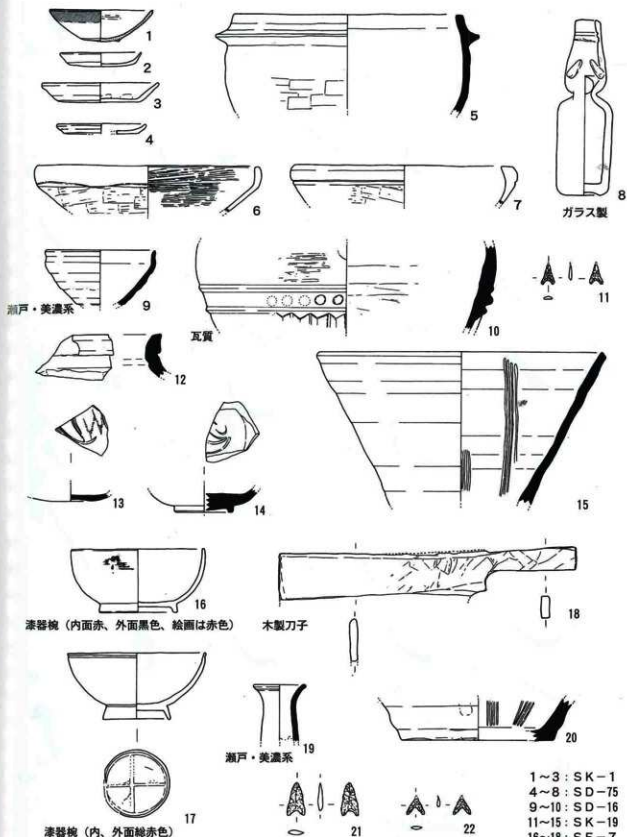
I・II期遺構平面図



Ⅲ期遺構平面図

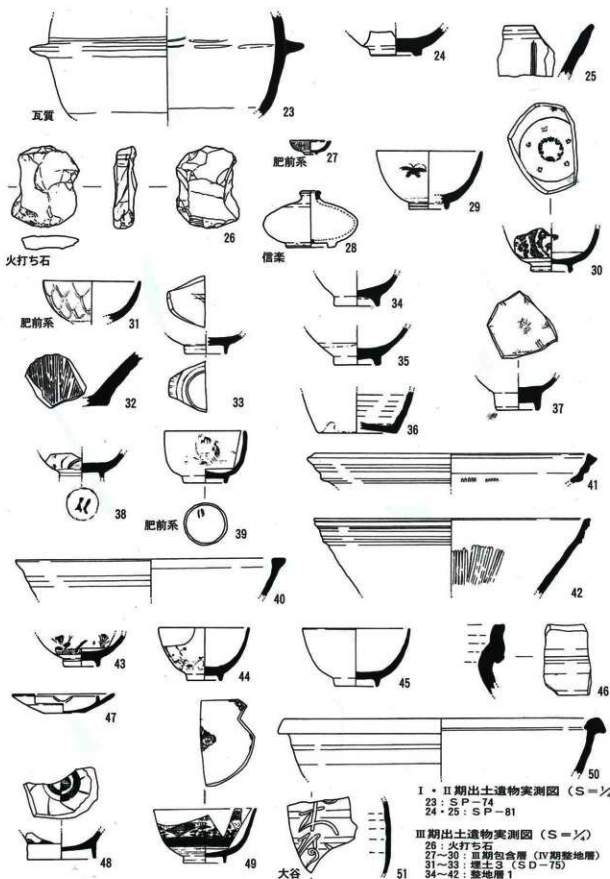


Ⅳ期遺構平面図



1~3: SK-1
 4~8: SD-75
 9~10: SD-16
 11~15: SK-19
 16~18: SE-7
 19~20: SK-51
 21~22: SD-60

I・II期出土遺物実測図 (S=1/4) (混入含む)



I・II期出土遺物実測図 (S=1/4)

23: SP-74

24・25: SP-81

III期出土遺物実測図 (S=1/4)

26: 火打ち石

27~30: III期包含層 (IV期整地層)

31~33: 埋土3 (SD-75)

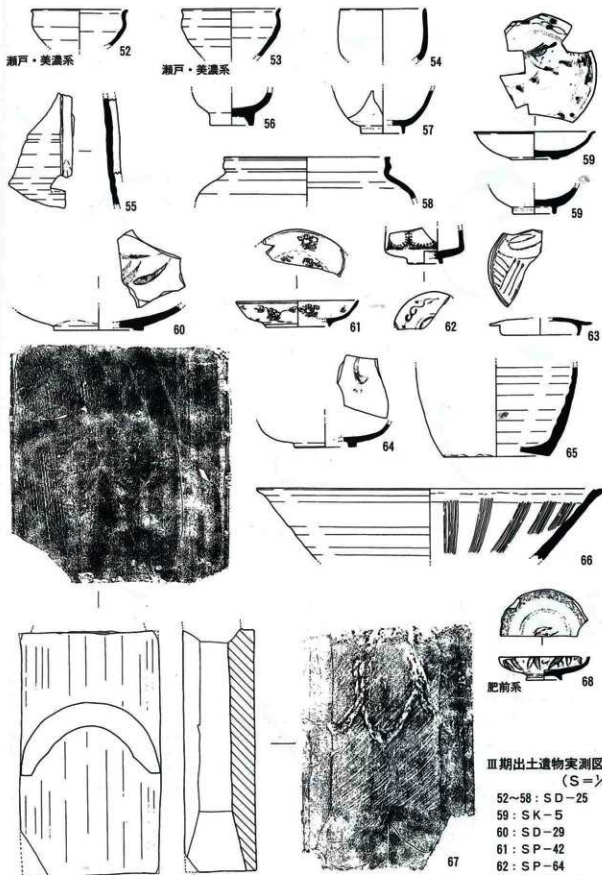
34~42: 整地層1

43: SD-28

44: SD-4

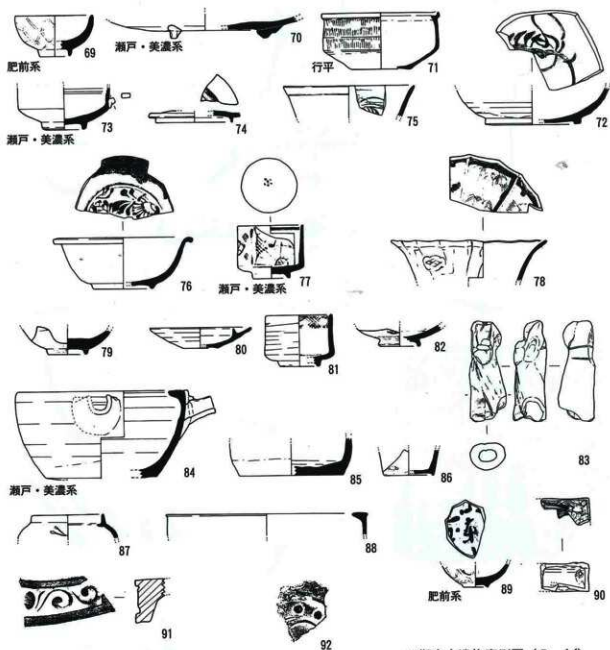
45・46: SD-22

47~51: SD-11



Ⅲ期出土遺物実測図
(S=1/4)

- 52~58 : SD-25
59 : SK-5
60 : SD-29
61 : SP-42
62 : SP-64
63~65 : SE-5
66~68 : SK-63



Ⅲ期出土物実測図 (S=1/4)

69~72: SE-66

Ⅳ期出土物実測図 (S=1/4)

73: 整地層14

74: 整地層27

75: 整地層32

68・76~78: Ⅳ期整地層 (全体)

79: SD-19

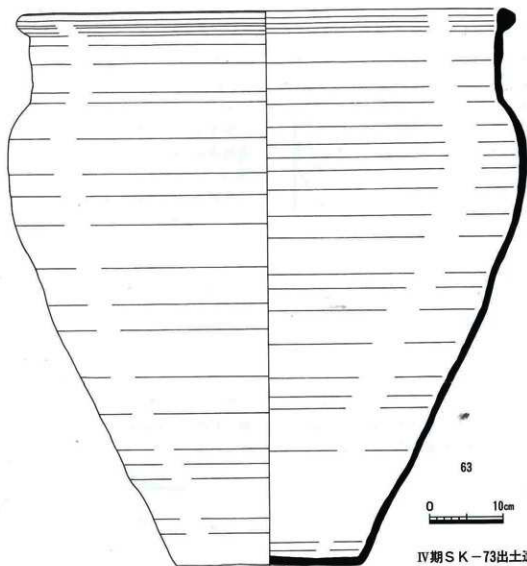
80: SD-19

81: SD-64

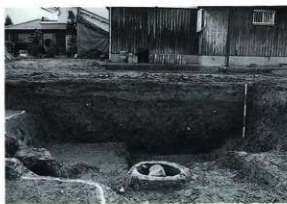
82・83: SD-33

84~86: SK-63

87~92: 埋土7 (SD-75)



IV期SK-73出土遺物



SD-60断面



SE-7断面状況

⑩ 下 鈎 遺 跡

調査地 栗東町大字苅原字下石原74他6筆

調査期間 1999年10月20日～2000年3月20日

調査面積 3910㎡



調査地位置図

調査地は下鈎遺跡の北西端部であり、西側に接してJR東海道本線（琵琶湖線）が、南にはJR草津線が走っている。過去の調査では、南東側に隣接した調査地において、弥生時代後期の大型掘立柱建物などが出土している。

調査の概要

遺構面は深さ20～30cmの水田耕作土と、深さ15cm程の灰色砂質土、黄灰色砂質土の水田床土を取り除くと現れる。検出面の地山は黄灰色の粘質土である。

遺構検出面の標高は、約93.5m～94mで、南西側が低くなっている。

主な検出遺構

検出した遺構は、河川、平安・鎌倉時代の掘立柱建物、溝、土坑、弥生時代の土坑、周溝墓などである。

河川は、E区の東側からS区へ流れている。S区では南東側に存在する別調査区の河川が合流し、ほぼ全面が河川になっている。时期的にも弥生時代から中世にかけての長期にわたり存在しており、大きく5回の切り合い関係が認められた。規模はE区で幅15m、深さ1.4mを測る。なお、E区では下層に層厚最大約60cmの植物遺体層が堆積していた。

遺物は少ないが、弥生土器、石器、奈良時代の須恵器、格子目叩きのある瓦、平安時代の緑釉・灰釉陶器、中世陶磁器類が出土した。

また、粘板岩製の磨製石畿がS区河川から出土している（図2～8）。

弥生時代の遺構は円形周溝墓S X 110、方形周溝墓と思われるS X 112（図3の網掛け部分）。土坑S K 11・12・60・113がある。掘立柱建物などは認められなかった。弥生時代後期末頃の甕や壺、高杯などが出土した。

平安時代の遺構は、掘立柱建物S B 30・41・65・79・83・154で、栗太郡条里（東へ約30°傾く）のものと、条里よりやや東へ主軸を振るもの2種がある。

鎌倉時代の遺構は、S B 192で5間×4間の掘立柱建物である。その他中世以降の土坑、溝、耕作痕が多数認められた。さらに近代の遺構として桶を転用した水溜状遺構や旧送電線の基礎などを確認した。（佐伯）

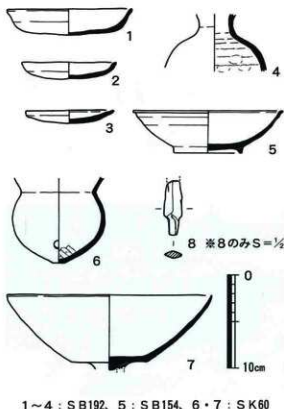


図1 出土遺物実測図

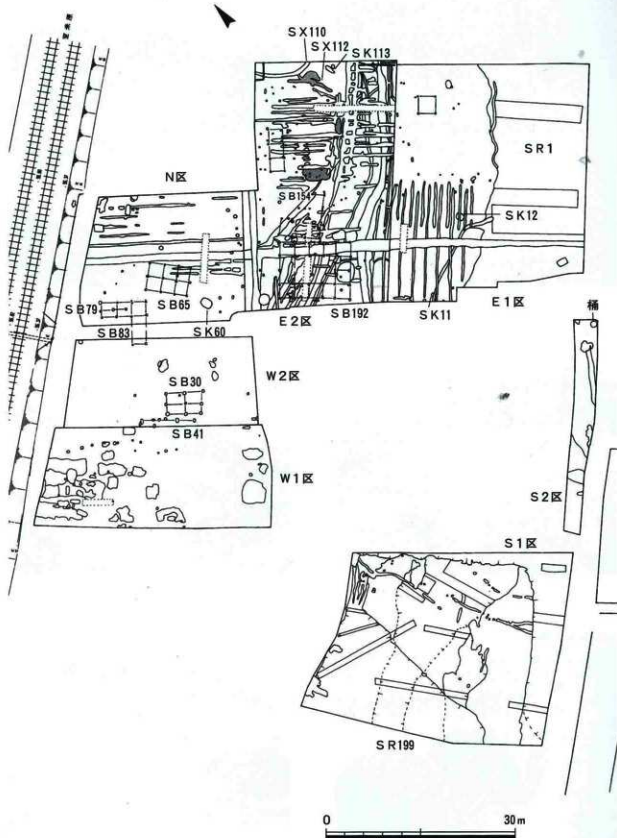


図2 遺構図



E2・N区



E2・N区 (東から撮影)



E1区 (北から撮影)



W1区 (西から撮影)



S2区 桶



S1区 東側 (南から撮影)

⑪ 下 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鈎725-1

調査期間 1999年8月9日～9月2日

調査面積 約300㎡



調 査 地 位 置 図

今回の調査は、共同住宅建設に伴う調査で、確認された遺構は、古墳時代の河川、溝、梁状遺構、平安時代の井戸、土坑、建物に伴うと思われるピットなどが確認されている。

梁状遺構は、溝1から土坑状に張り出し、径約3～5cmほどの杭で土坑を囲むように打ち込んだものである。平安時代後期と考えられる井戸は溝1を切って存在する。大きさ約90×110cm、深さ約60cmで、中央に曲げ物を据えている。曲げ物には、ひらがなと思われる墨書が認められる。また、溝1の北西に約95×85cm、深さ約50cmの土坑があるが、井戸の残骸の可能性もある。

(近藤)



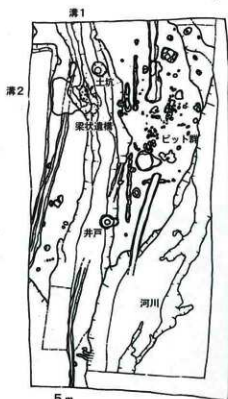
調査地（北西から南方向をみる）



梁 状 遺 構



井 戸



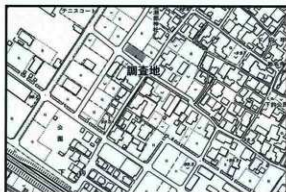
調 査 地 遺 構 図

⑫ 下 鈎 遺 跡

調査地 栗東町大字下鈎1648・1650

調査期間 1999年10月18日～11月16日

調査面積 約350㎡



調査地位置図

下鈎遺跡は、縄文時代前期から江戸時代以降にかけての複合遺跡である。中でも遺跡の西から北にかけて確認されている弥生時代中・後期の集落は、環濠、大型建物、青銅器出土など、目を見張るものがある。

一方、遺跡東南部の調査では、多量の本製品が出土した古墳時代の河道、溝をはじめ、縄文時代の包含層、弥生時代後期の堅穴住居、鎌倉時代初頭の掘立柱建物、土墳墓、井戸などが確認されている。

今回確認された遺構は、弥生時代末と考えられる溝状遺構、建物の可能性をもつピット、平安時代後期の掘立柱建物、井戸などが確認されている。調査区の西半分は、時期不明の河道が存在するため、北隅の一部を除いて明



作業風景

確な遺構は認められなかった。弥生時代の溝状遺構は、検出長約15m、幅20～100cm、深さ約5～20cmで、東から南方向に向かって隅丸方形に囲むように確認されている。溝の一部が約1.3m途切れ、ピットでつなぐような部分が見られる。出入り口のような施設であった可能性がある。またその内部にあたる東隅で確認されている2つのピットは、溝に伴って建物を構成する可能性が高い。弥生時代中期中頃を中心に扇状地でしばしば確認されている周溝をもつ建物（平地式建物）に類似点が見られるが、今後の類例を待って再度検討したい。平安時代後期の掘立柱建物は、調査区の東側に集中し、少なくとも2棟以上は存在していたと思われる。建物の主軸は、ほぼ栗太郡主条里に沿ったもので、2×2間以上の建物と、4間×2間以上の建物が存在する。後者の建物には、ピットの礎盤に板が敷かれている部分が認められた。南側で確認された井戸は、建物とほぼ同時期の所産と考えられるものである。平面プランは隅丸方形で、大きさは約110×130cm、深さ約85cmである。中には、4段の曲げ物が残存していた。出土遺物には、黒色土器碗(1)、白磁碗(2)、土師皿(3・4)などがある。

この他、前述した弥生時代の溝状遺構から縄文土器片、石鏃、サヌカイト剥片が比較的まとまって出土している。付近に遺構の存在が予想される。

(近藤)



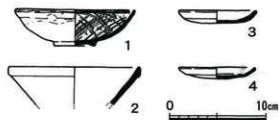
井戸



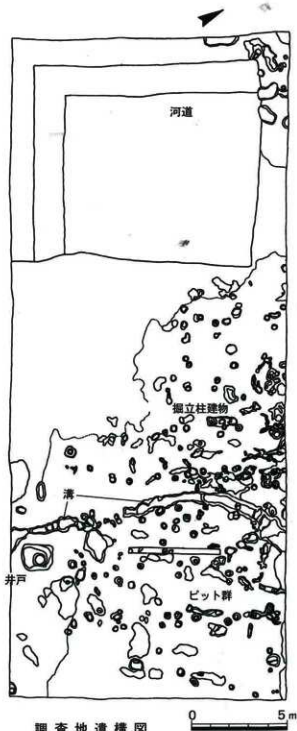
調査地全景（上空より）



弥生時代遺構（白線部分）



井戸出土遺物



調査地遺構図

⑬ 下 鈎 遺 跡

調査地 栗東町大字下鈎字神ノ子1216-3他

調査期間 1999年7月26日～10月26日

調査面積 1100㎡



調査地位置図

下鈎遺跡は、縄文時代前期から近世にいたる複合遺跡である。当調査地は、弥生時代中期末の環濠集落の北西端にあたり、弥生時代後期後半では集落域の中心部である。

遺構検出面の標高は約97.3mで、水田耕作土と床土を取り除くと黄灰色粘質土の地山があらわれる。

遺構は、南西側調査区で弥生時代の環濠、掘立柱建物、櫓列が、北東側調査区では、平安時代の溝1条、弥生時代の溝、河川を検出した。

南西側調査区の南端で検出されたのは、中期末の環濠である。1997年度調査地で検出された2条の環濠のうち外濠に対応する。幅3.5m、深さ0.5mを測る。97年度調査では寄せ棟造りの高床建物を線刻した絵画土器などが出土しているが、本調査区においては、中期の土器はみられず、上層から後期の土器が出土した。

SB91は、桁行2間、梁間1間、3.6m×3.4mの掘立柱建物。柱穴は直径0.2m、深さ0.1～0.2mを測る。梁間1間型の掘立柱建物は弥生時代に多くみられ、97年度出土の大型建物と方位がほぼ同じことから、弥生時代後期の所産と考えられる。その他櫓列状の柱穴列を確認した。柱穴のうちP59には、柱を抜いたあと、鉢と高杯を埋納していた。

北東側調査区のSD2は、幅0.85m、深さ0.4mの溝である。人為的に埋められたブロッ

ク土から完形の高杯と器台が出土した。

河川跡SR1は、幅約10m、深さ約1m。今年度の調査では、長さ37mにわたり検出した。下層の粘質土および砂層からコンテナ100箱以上の土器の他、石器や金属器などが出土した。土器の大半は弥生時代後期後半段階のものであったが、一部に縄文晩期、弥生前期・中期のものもみられた。土器の中には搬入品(図3-4・5・7)もみられた。下鈎遺跡で初の出土となった前期の広口壺(図3-8)は、弧状文や直線文で体部を飾る。さらに口縁部内面及び体部外面全体には、黒漆を下地に水銀朱を素材にした朱漆を塗っている。

図3-9～18は銅鏝で、10点出土した。そのうち1点は奇数孔の多孔銅鏝である。銅鏝は、隣接調査区の同一河川から1989年に7点、1992年に2点が出土。また、中期環濠集落内でも1982年に1点出土しており、合計20点となった。銅塊も出土しているので、青銅器生産が行われていたようだ。

19は青銅製の環である。外径で12.7cmを測る。大形の銅鏝と考えられるが他に類例をみない。1986年に中期環濠集落から出土した銅鏝は直径5cmであり比較されたい(写真)。

20は石杵である。握りやすい自然石を利用している。水銀朱の付着が認められる。また図示はしていないが、空色のガラス小玉が4点出土した。径は0.4～0.5cmである。墳墓以外からの出土は極めて珍しい。

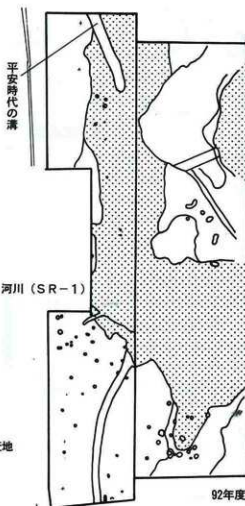
その他建築部材などの木製品や、クルミ、モモなどの核。桜の皮などの自然遺物も出土している。

以上が本調査の概要だが、河川からの出土遺物は質量共に特筆すべきものがある。しかし、河川の周囲をみると住居跡などは存在せず遺構の密度も希薄である。河川に隣接してつくられた大型建物の性格を考える上で実に興味深い。(佐伯)

※朱と銅の分析は、滋賀県立安土城考古博物館、
湖沼文化財保護協会中川正人氏による。



環濠

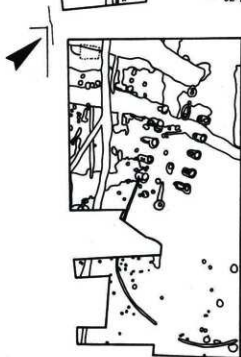


平安時代の溝

河川 (SR-1)

99年度調査地

92年度



97年度



図2 遺構図

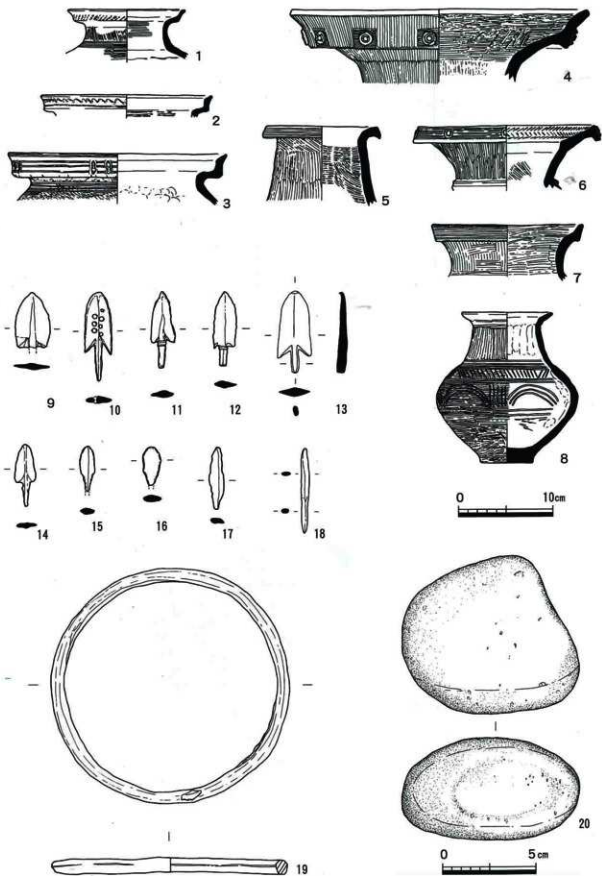


図3 出土遺物実測図 土器S=1:4 その他S=1:2



環 濠



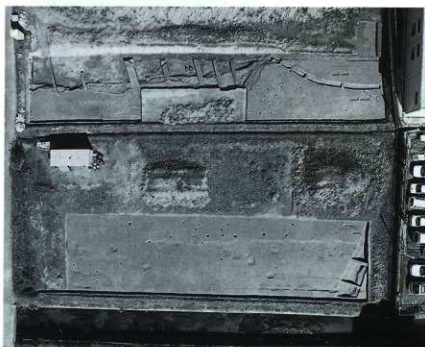
1986年度銅釧と1999年度銅環



SR1 遺物出土状況



銅環出土状況



調査地全景



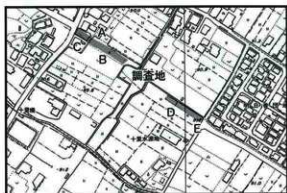
多孔銅鏃出土状況

⑭ 十 里 遺 跡

調 査 地 栗東町大字十里81他

調査期間 1999年4月26日～2000年3月17日

調査面積 約1000㎡



調 査 地 位 置 図

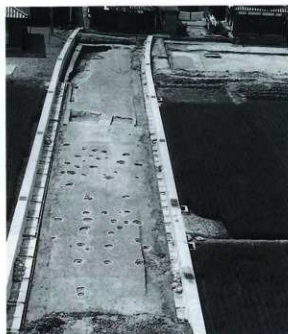
十里遺跡は、野洲川が形成した扇状地に存在する。南側には、中小河川である中ノ井川が接し、河川を介して琵琶湖に通ずる。

過去の調査では、弥生時代後期の方形周溝墓や古墳時代から平安時代にかけてのピット、溝、土坑などが確認されている。しかしいずれの調査も小規模な調査のため、集落の展開、様相がつかめていないのが現状である。

今回の調査区は、霊仙寺遺跡と接する十里遺跡の南端に当たる地域で、町道路建設に先立つ調査である。

確認された遺構は、飛鳥時代の区画溝、掘立柱建物2棟以上、梁状遺構、ピットなどがある。

区画溝は、ABC地区にまたがって存在し、4本の溝（SD-1、SD-2、SD-3、SD-4）によって構成される。SD-1は、東西方向にのびる溝で、中央付近が浅い土坑状になる。検出長は、約19.5m、幅約80～150cm、深さ30～50cmである。SD-2は、南北方向にのびる溝で、検出長は約50m以上になる。幅約最大で4m、深さ約80cm前後である。溝内に梁状施設と思われる遺構があり、ピットの周りに杭が囲むように残存していた。



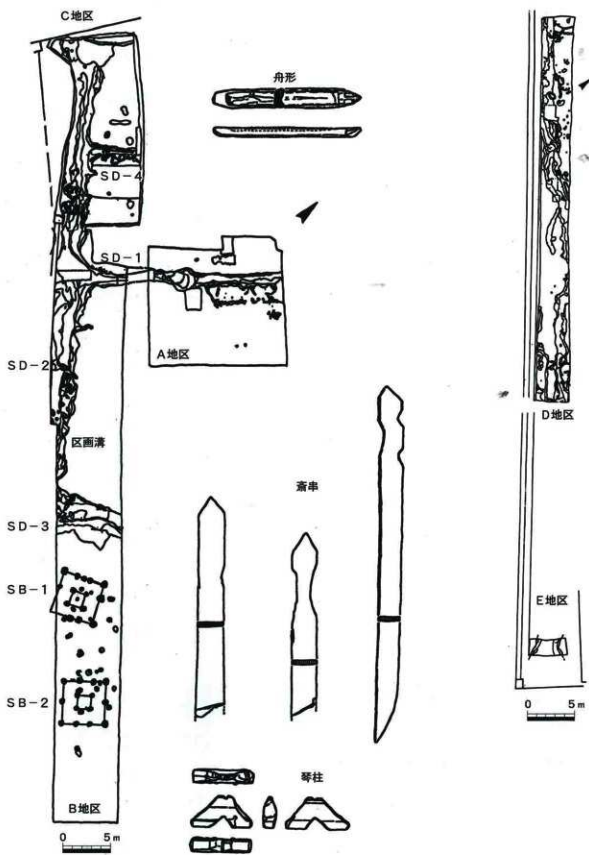
A・B地区掘立柱建物、区画溝



C地区SD-2、SD-4



D地区からE地区方向をみる



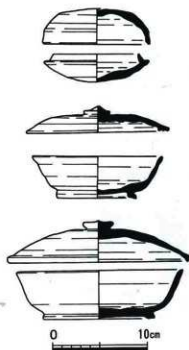
調査地遺構図と出土遺物

SD-3は、東西方向にのびる溝で、SD-1より東方向に振れる。検出長は、約7m、幅1.5~4m、深さ20~30cm前後である。SD-4はSD-1の西側に存在し小区画を形成する。方向はSD-1とほぼ同一で、検出長は、約5m、幅30~70cm、深さ20~40cmである。

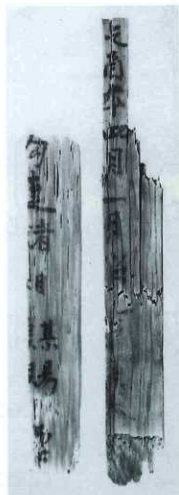
掘立柱建物は、SD-3の南側に2棟以上存在する。SB-1・2は、いずれも一辺が約4.3m前後のほぼ正方形プランをもつ。ともに屋内に4本の柱を持ち、通常よく見られる建物（住居・倉庫）とは性格を異にする。建物の方位は、SB-1がSD-2、3と共通し、SB-1がSD-1と共通する。

D地区では、西から東に向かってのびる溝が存在し、E地区にもその続きと思われる溝が存在する。

出土した遺物は、須恵器・土師器（墨書土器、墨痕土器、赤彩土器を含む）などの土器類、木器としては、木簡、祭祀具（斎串、刀形、舟形など）、農工具（杵、鎌、木錘など）、漁猟具（たも）、遊戯具（琴柱）、容器のほか、燃えさしが多量に出土している。また馬の骨と思われるものや、桃、ヒョウタンなどの種子も比較的多く出土している。産業関連の遺物としては、鞆の羽口、漆付着の土器、製塩土器などがある。これらの遺物は、主にSD-2から出土しており、祭祀遺物が多いことが注目される。また木簡が3点出土しており、1号木簡には、「勾連」がみられる。栗東町に残る「まがり」の字名（上鉤、下鉤）との関連が注目され、栗太郎における豪族のひとりではないかと考えられている。2号木簡は、幅7.4cm、厚み1.4cmの板に書かれたものである。「道師」とは、中央から派遣された職能をもった集団もしくは、道教にかかわる人とする説がある。3号木簡は、「乙酉年四月一日」とかかれた、紀年名木簡で、同じ層から出土している土器の年代観から、ほぼ685年として大過ない。これらの木簡は、いずれも



SD-2出土遺物



1号(左) 3号(右) 木簡の表

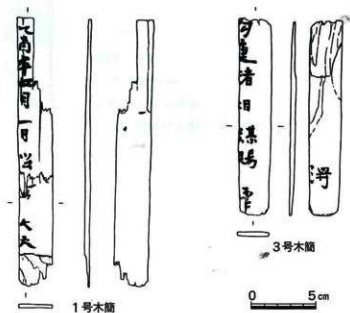
同じ層で出土していることから、ほぼ同時期に廃棄されたものと思われる。

今回確認された区画溝には、祭祀関連の遺物が多量に出土していることや、特殊な建物が付近に存在していることを合わせると祭祀を行う場所であったことが考えられる。また

木簡の出土も、祭祀遺物と合わせて十里遺跡の性格を考える上で注目される。さらに、飛鳥時代の木簡がまとまって出土している野洲郡の西河原森ノ内遺跡や、琵琶湖岸に集中する草津の古代寺院との関連も今後の課題であろう。(近藤)



1号(左)3号(右)木簡の裏



2号木簡

SD-2出土木簡



2号木簡「道師」

⑮ 小 柿 遺 跡

調 査 地 栗東町大字小柿 5 丁目376・377他

調査期間 1999年3月10日～6月15日

調査面積 4120.73㎡

はじめに

小柿遺跡は葉山川流域の沖積地に位置し、過去の調査では、弥生後期から鎌倉時代にかけての集落跡や古墳時代の墳墓が検出された。

特に97年度調査では縄文時代の遺構が展開する第2の遺構面（下層面）が確認された。

今回の調査区は、97年度調査区から150m離れたが、下層遺構面の範囲確認が課題であった。

基本層序

調査地の基本層序は上層から順に、近世の遺物を包含する層厚20cmの灰褐色粘質土（耕土）と10cmの床土を経て、平安時代の遺構が展開する黄褐色シルト層（層厚20cm、第1遺構面）。これを包含層とする黒味を帯びた黄褐色粘質土層（第2遺構面）となる。

主要遺構の概要

以下第1・2遺構面毎に概述する。

第1遺構面：栗太郎条里にほぼ沿った耕作痕・溝・掘立柱建物を検出した。

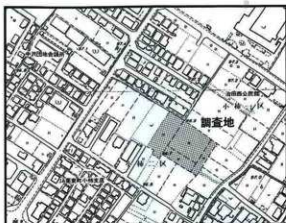
SD-1：重複関係により第1遺構面で最も古く、幅4m、深さ0.9m以上を測るが、遺物は皆無で、時期の特定に至らなかった。

SD-29：幅1～4m以上、深さ15cmを測る。埋土は青味の灰褐色粘質土で、古墳～平安時代の須恵器・灰釉陶器・黒色土器が出土した。

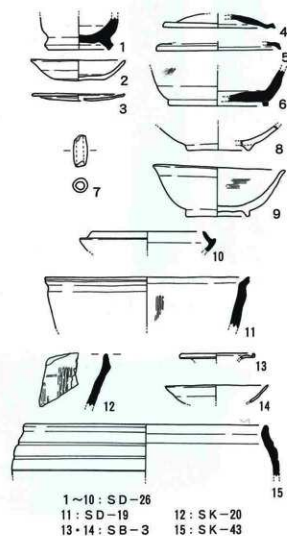
掘立柱建物：SB-1・2・3があり、いずれもSD-29に平行し、埋土も類似する。SB-3からは平安時代の遺物が出土したが、他の建物は時期特定に至らなかった。

SK-30：平面規模1.5×2.5m、深さ30cmを測り、16世紀代の信楽焼播鉢が出土した。遺物を伴う遺構では調査区で最も新しいが、これに伴行する建物遺構は確認できなかった。

素掘り溝：灰褐色粘質土を埋土とし、重複関係では最も新しいが、時期を特定する遺物に恵まれなかった。



調査地位置図



1～10：SD-26
11：SD-19 12：SK-20
13・14：SB-3 15：SK-43

図1 第1遺構面出土遺物実測図（S=1/4）



掘立柱建物 (SB-3)

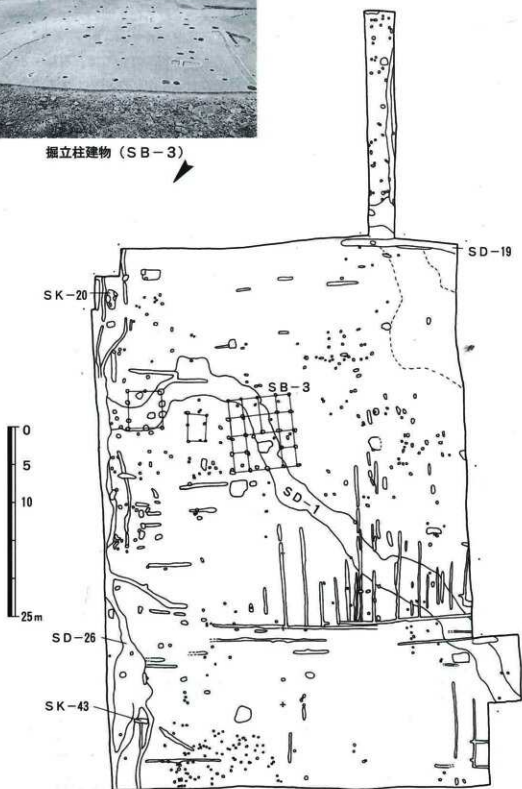


図2 第1遺構面平面図

第2遺構面

トレンチ範囲は第1遺構面の中央部で、竪穴住居・土坑を検出した。

竪穴住居の埋土は青灰色粘質土であるが、地山に比べ砂粒が多くやや軟質で、炭の混入が認められるが、全体的に黄色味を帯びており、土色上の相違は少ない。遺構の規模は表1に提示した。

住居形態は、楕円形・隅丸方形・円形・不定形に分かれ、多様な形態が認められる。

遺構の時期は、出土遺物が極めて微量で小片に止まり、摩滅が著しいため時期を特定し難い。包含層からは縄文時代と思われる土器片や石鏃が出土し、弥生時代以降の遺物を見ないことから、縄文時代の遺構と思われるが、今後の検討が必要である。

重複関係から住居の変遷をたどると、比較的大規模な不定形の住居から小型の円形住居に推移する可能性があるが、併行関係も含め、それ以上の判断はできない。

炉については、1997年度調査でBC3500～2000年頃の所産と思われる隅丸方形の住居に石囲い炉を検出したが、今回は埋土中に炭の混入が認められるにも関わらず、地床炉を含め存在は確認できなかった。

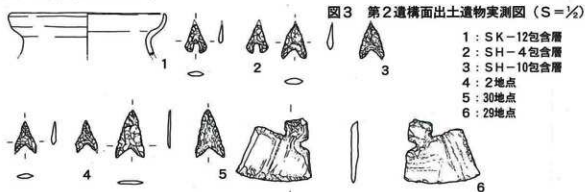
出土遺物の特徴としては、石鏃・チップ・未製品の石器類が、住居・土坑の内部・周辺にまよって確認できた。図4のドット(黒い点)は主要石器類(チップ・未製品を含む)の分布状況を示したものである。

SK-10は、青灰色粘質土の埋土から総量7.24gのチップが出土した。

まとめ

今回の調査では1997年度調査区と同様、下層遺構面において、広範囲に遺構が展開することを確認した。特に住居遺構を多数検出したことで、一定規模の集落の存在が想定される。出土遺物は石器類を主体とするが、加工地などの性格を含め今後の調査に期待する。

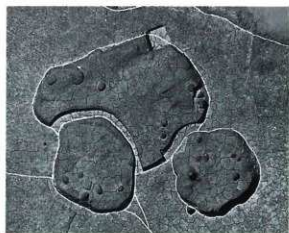
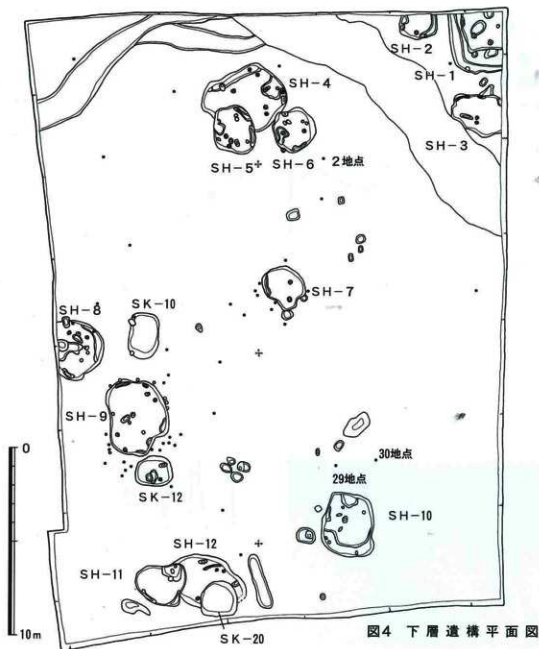
(藤岡)



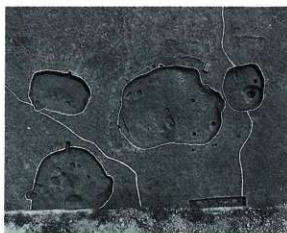
- 1 : SK-12包含層
- 2 : SH-4包含層
- 3 : SH-10包含層
- 4 : 2地点
- 5 : 30地点
- 6 : 29地点

表1 第2遺構面検出遺構一覧

遺構番号	平面規模 (m)	床面までの存在壁高 (m)	形態	柱穴等	備考 (gはチップ・製品等の総量)
SH-1	2以上×2以上	0.15	隅丸方形	柱穴数個	土器片
SH-2	2×1.5以上	0.12	円形?	柱穴数個、壁溝一部	
SH-3	2.5以上×2	0.2	隅丸方形	柱穴?、壁溝一部	土器片
SH-4	4×3.2	0.2	隅丸方形	柱穴数個、壁溝一部	サマカイト、石鏃 (0.7g)
SH-5	2×2.5	0.2	隅丸方形	柱穴数個、壁溝一部	
SH-6	2.3×2.3	0.2	円形	柱穴数個、壁溝一部	サマカイト (0.24g)
SH-7	2×2.2	0.15	楕円形	柱穴2個、壁溝一部	土器片、サマカイト (7.32g)
SH-8	3以上×3以上	0.24	円形	柱穴数個、壁溝一部	サマカイト (3.04g)
SH-9	3×4	0.14	不定形	柱穴数個、壁溝一部	サマカイト (15.26g)
SH-10	2.6×3.4	0.18	隅丸方形	柱穴数個	
SH-11	2.6×2.2	0.2	不定形	壁溝一部	
SH-12	4.2×3	0.3	楕円形	?	土器片、サマカイト (5.89g)
SK-10	1.5×2.4	0.32	隅丸方形	なし	サマカイト (7.24g)
SK-12	2×1.5	0.24	隅丸方形	なし	土器片、サマカイト (9.5g)
SK-20	1.8×1.8	0.3	円形	なし	



SH-4・5・6全景



SH-8・9、SK-10・12全景

⑬ 小 柿 遺 跡

調査地 栗東町大字小柿1丁目280-1 他
調査期間 1999年12月22日～2000年3月17日
調査面積 540㎡



調査地位置図

小柿遺跡は縄文時代以降様々な時代の遺構遺物を残す複合遺跡として周知されている。

今回の調査でも弥生時代の竪穴住居や土坑中世期の条里併行溝などが確認された。

弥生時代のものはいずれも後期後半～庄内



竪穴住居調査状況



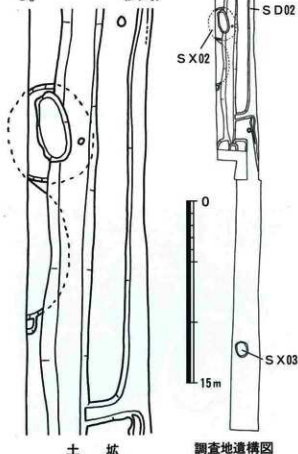
竪穴住居土器出土状況

併行期に位置づけられる。

住居は方形を呈し、4主柱構造を取り、床面中央に不整形形状の土坑を有する。

土坑は径1m程度の円形のもの、径2.5mの円形土坑中央に0.8×1.8mの二重のほりこみを持つものなどがある。後者の埋土上層からはおびただしい量の土器が出土している。また、明確ではないが、掘立柱建物の存在も予想される。

条里併行溝は幅1.5mを測り、1m間隔で3条が確認されている。埋土内から黒色土器が出土する。(大崎)



調査地遺構図

国庫補助事業・町事業 埋蔵文化財発掘調査

1999年度町事業・国庫補助事業調査

No	遺跡名	所在地	調査原因	現地調査期間	調査面積	調査結果	ページ	担当
1	小龍大塚 10号墳	下戸山1201-3・4	個人住宅	1999.9.17～ 1999.10.5	195㎡	古墳の主体部・周溝	52	佐伯
2	十里	十里字南ノ口226-2 ・227-1	個人住宅	1999.4.19～ 1999.5.10	168㎡	溝・土坑・櫓	56	近藤
3	伊勢	野尻字510-1・513	個人住宅	1999.4.19～ 1999.5.2	234㎡	中世建物等	57	佐伯
4	霊仙寺	霊仙寺296	住民参加	1999.8.18～ 1999.8.24	22㎡	溝・土坑(弥生)	58	調査会

⑪ 小槻大社 10号墳

調査地 栗東町下戸山1201-3・4

調査期間 1999年9月17日～10月5日

調査面積 195㎡

はじめに

小槻大社10号墳は下戸山の丘陵上に造られた古墳時代中期の方墳である。

この丘陵は平野部に面しているため、豪族の奥津城として利用された。

首長墓をみると4世紀後半の北谷11号墳(105mの前方後円墳?)、下戸山古墳(現況で52mの円墳)、5世紀前半の地山古墳(90mの帆立貝形前方後円墳)などが存在する。また、後期には北谷古墳群(9基)や小槻大社古墳群(9基)が造営されている。

また、律令期には、栗太郡衙がおかれ、式内社の小槻大社が鎮座するなど、この地域の有力氏族、小槻山君の本拠地であることがわかる。

小槻大社古墳群は、小槻大社境内と、その周辺に分布する古墳群である。10基の古墳が

分布する。境内に残る1号墳は、古墳群中最大規模で、直径約25mを測る。他は、14mほどの規模である。未調査のため詳細は不明だが、10号墳以外は後期古墳と考えられている。

10号墳は、境内から谷を隔てた西側の尾根上に単独で立地している。標高は約126mである。

調査の経過

1990年(平成2年)に個人住宅建設に先立つ確認調査により発見された。調査は、幅約50cmのトレンチを墳丘に数本設定し、墳丘の規模と主体部の有無を確認することを目的として実施した。その結果、墳丘は15.5m×13.5mの方墳で、主体部は2基の割竹形もしくは船形の木棺であることが判明した。

そのため住宅は、土地所有者の意向により、東側周溝上に建てられ、主体部などは埋め戻し保存されることになり今日に至った。

調査の概要

10号墳は墳丘・主体部の主軸を西に23度振る方墳である。墳丘規模は、南北15.5m、東西13.5m、周溝幅3～3.5m、深さ1m。



小槻大社10号墳と周辺の古墳

S = 1/10,000

埋葬主体部は割竹形木棺2基の直葬である。墓坑は長方形で墳丘中央に南北に配される。長辺5.5m、短辺3.3m、深さは0.5m。2基の木棺は、墓坑に同時に埋納されている。棺の規模は、長さ4.2m、幅0.55m。木棺底部は地山を掘り込んでおり、深さ0.7を測る。

主体部出土遺物

遺物は東棺から鉄剣一振り、西棺から竖櫛1点が出土した。

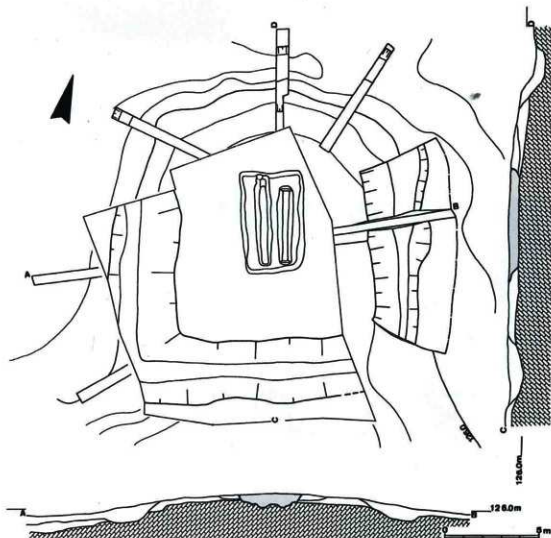
鉄剣は長さ25.8cm、幅2cm。茎部長5.5cm、幅1.2cm。刃関から3cmの位置に径3cmの目釘孔がある。

出土状況を見ると、棺の中央部からやや南、

主軸からは東寄りの位置に、切先を北に向けて置かれている。遺体の脇に副葬されたものだろう。

竖櫛は、ヒゴをU字形に束ねてムネ（頭）部とする湾曲結歯式である。ムネ部に塗られた黒漆の膜だけが残存していた。漆膜に残る痕跡から太さ1mm程のヒゴを13本束ね、ムネ頂部から2cmの位置で幅7cmに糸を7回巻き付け結束している。ムネ部最大幅は3cmである。

棺の中央部で、歯部を北側に向けて検出された。人骨に残る例や埴輪から櫛の装着方法を見ると、前頭部の生え際から上方に差し込



遺 構 図

むのが通例なので、西棺の遺体は北枕であったと考えられる。

周溝出土遺物

南側の周溝中央部から、須恵器の壺2点と角杯1点が破砕された状態でまとまって出土した。

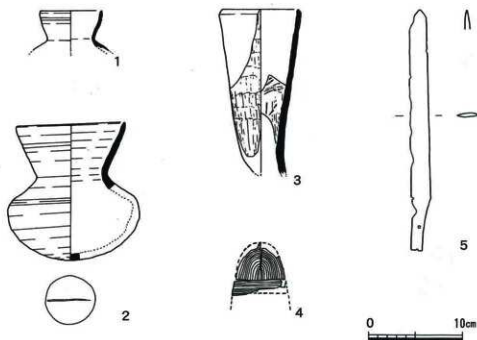
周溝底部に層厚20cmの黒色土が自然堆積した後に置かれている。5世紀後半に造られた古墳に対し、6世紀前半に墓前で須恵器を用いた何らかの行為が行われたようだ。

角杯の出土例は、近畿地方では東大阪市西岩田遺跡に次ぐ2例目である。

小槻大社10号墳は、在地豪族と渡来文化の関わりを示す貴重な事例となった。(佐伯)



角 杯



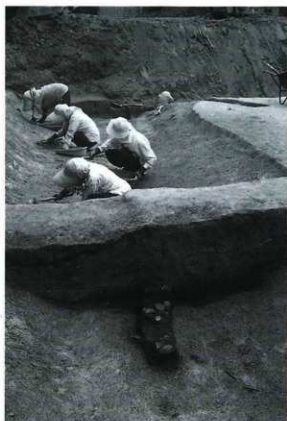
出土遺物実測図 (4のみ $S=\frac{1}{2}$ 、他は $S=\frac{1}{4}$)



10 号 墳 全 景



豎 梯 出 土 状 況



角 杯 ・ 壺 出 土 状 況



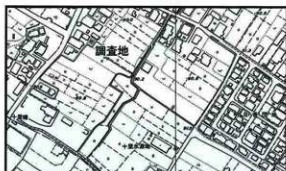
主 体 部 全 景

⑱ 十里 遺 跡

調 査 地 栗東町大字十里字南ノ口226-2他

調査期間 1999年4月19日～5月10日

調査面積 168㎡



調 査 地 位 置 図

今回の調査は、個人住宅建設に伴う調査で、確認された遺構は、飛鳥時代の溝（SD-1）、土坑（SK-1）、囲い施設（SX-1）、柵（SA-1）、ピット、江戸時代以降と考えられる土坑などがある。SD-1は町道調査区で確認されているSD-2（P42参照）と連結して区画溝を形成している。溝幅約80～150cm、深さ約30～50cmで、溝の中には土坑が存在する。中から、桃の種子、燃えさしなどと一緒に白玉が一点出土した。また溝の東側では、台形状に浅い掘りこみがあり、囲い施設のようなものが存在していた可能性がある。さらに、そこから約4m南東に2つのピットが存在し、塀のような役割を果たしていた可能性を考えておきたい。（近藤）



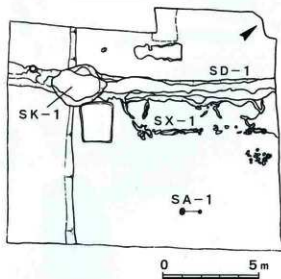
SD-1内SK-1遺物出土状況



調査地全景（上空より）



SX-1・SD-1（北東から東南をみる）



調 査 地 遺 構 図

⑬ 伊勢遺跡

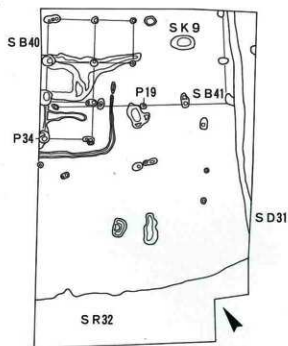
調査地 栗東町大字野尻510-1・513

調査期間 1999年4月19日～5月2日

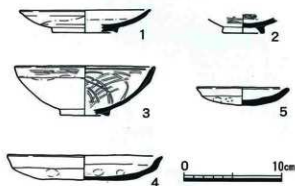
調査面積 234㎡



調査地位置図



遺構図



出土遺物実測図

伊勢遺跡は守山市伊勢町を中心に栗東町野尻に広がる主に弥生時代後期の集落跡である。

これまでに守山市教育委員会の調査により方形区画や大型の掘立柱建物群などが出土し、滋賀県南部地域において最も重要な遺跡と考えられている。

栗東町域での調査でも1994年に屋内棟持柱を持つ大型建物が出土している。また、1995年度には、弥生集落域の南限にあたる河川を調査した。河川は幅8m、深さ約1mで、土器の他、天秤棒状の木製品などが出土した。

今年度の調査は、個人住宅建築に先立ち実施した。検出した遺構は、河川、溝、掘立柱建物、土坑などである。

調査区南端のSR32は1995年度調査の河川と同じ遺構である。調査区東端の溝SD31とともに住宅基礎部から外れるため掘り込みを行っていない。

SB41は、桁行き4間以上、梁間2間以上の掘立柱建物で、P19から平安時代の灰釉陶器皿と瓦器椀が出土した(1・2)。SB40は、現状で3間×1間の掘立柱建物である。南と東側に雨落ち溝がみられ、その途切れた部分に1間分の付属施設が付く。P34から12世紀後半頃の黒色土器椀と土師器皿が出土した(3・4)。SK9は1.2m×0.7m、深さ65cmの土坑で、底部から土師器皿(5)が出土した。SB40と同時期と思われる。

期待された弥生時代の遺構は、確認できなかった。(佐伯)



調査地全景

② 霊仙寺遺跡

調査地 栗東町大字霊仙寺296

調査期間 1999年8月18日～24日

調査面積 22㎡



調査地位置図

霊仙寺遺跡は中ノ井川右岸の標高約90mの地点に所在する縄文時代から平安時代の遺跡である。

本調査は、栗東町教育委員会が主体となり、



遺構検出状況



遺構掘り下げ作業風景

霊仙寺遺跡調査会が実施する住民参加による発掘調査で、霊仙寺行政区内に残る寺院伝承地を明らかにすることを目的としている。今年度の調査は、1998年度に引き続く第2次調査である。

今回の調査では溝2条・土坑7基が発見された。SD-1は幅1.4m前後、検出面からの深さ5cmで、朝顔形埴輪1点が出土している。SD-2は幅0.8m、深さ0.3m前後の溝で、弥生時代前期の土器に凸帯文土器がともなって出土した。

土坑のうちSK-6は幅1m前後のもので、SK-7に先行する。SK-6からは弥生時代前期の土器が、SK-7からは弥生時代前期の土器及び石鏃1点が出土した。

(清水、松村、雨森)

文 献

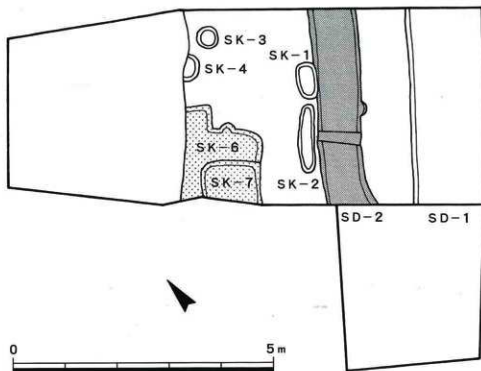
霊仙寺遺跡調査会『住民参加による発掘調査 霊仙寺遺跡発掘調査記録』2000



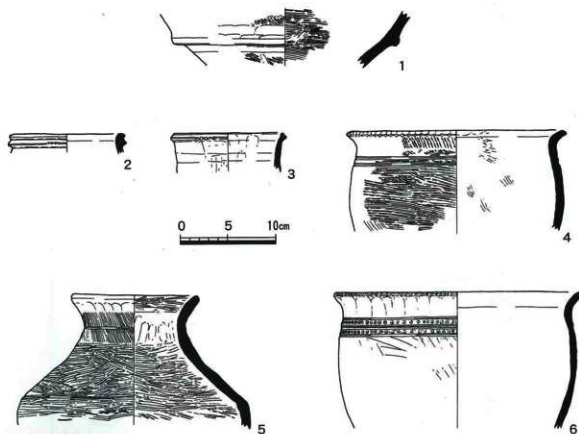
SK-5・6・7 完掘状況



遺構 完掘状況



調査地遺構図



1 SD-1 2~4 SD-2 5, 6 SK-6

出土遺物実測図

発行日 2001年(平成13年)3月31日

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団

埋蔵文化財調査課

滋賀県栗太郡栗東町大字下戸山47番地 〒520-3011

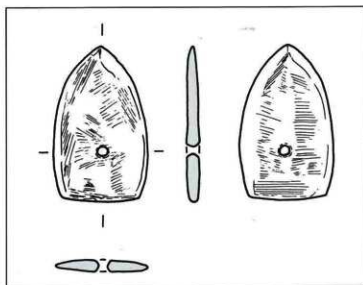
栗東町出土文化財センター内

TEL 077-553-3359 FAX 077-553-3514

印刷・製本 (株)スマイ印刷工業

滋賀県栗太郡栗東町大字川辺568-2 〒520-3014

TEL 077-552-1045



坊袋遺跡出土 磨製石鏃 (S=1/2)